THE SAISON FOUNDATION
viewpoint
【vjú:póint: 視点、観点、見地、立場】

96
The Saison Foundation Newsletter
15 December 2021

セゾン文化財団ニュースレター 第96号
2021年12月15日発行
https://www.saison.or.jp
公益財団法人セゾン文化財団

特集◉温泉♨へのいざない

温泉と温泉地は、一方では自然の力を身近に感じられる場所であり、神事や祭りとも深く関係すると同時に、もう一方では観光産業によって人と資本が集まる要地として機能してきた。さらにその多くは、SDGsという概念が掲げられるずっと前から、地域の人々によって持続性を念頭に共同管理され、内外に開かれた日本独自の「コモンズ」でもある。人々に休息や快楽、あるいは思索の場と機会をもたらしてきた温泉(地)は舞台芸術とも縁があり、それは現在も続いている。本号ではそうした温泉の魅力を、芸術や文化の視点から捉えてみようと、温泉地とかかわりのあるアーティストたち、そして温泉の専門家にご寄稿いただいた。

01 梅田哲也◉Oの穴で聴く地獄の声 p.001
02 太田信吾◉「継承」の危うさから逃れるために──変わりゆく温泉街と芸者文化の衰退 p.005
03 石川理夫◉《よみがえり》と《創造》の泉としての温泉地 p.009

01

梅田哲也
Tetsuya UMEDA

Oの穴で聴く地獄の声

別府中央市場共同組合 温泉跡 提供:BEPPU PROJECT

喫茶店のマスターから聞いた話

別府の町には壁で不自然に仕切られた半円の湯船が複数存在しています。現在使用されていない湯船の中には円形をとどめたままのものもありますが、これは、戦前の大衆浴場が主に混浴であったことの名残です。戦後にGHQが壁を立てて男女の浴槽を区切ってしまったのですが、当初は板が立ててあるだけでお湯の中は繋がっていたので、別府のとある喫茶店のマスターによれば、子どもはよく潜って反対側にいる親に会いに行ったそうです。また、マスターが子どもの頃には、親が働いている仕事先の屋根裏や物置の中に暮らすような、家を持たない同級生の家族がいたそうです。食事は大衆食堂で他人と一緒にとって、寝るときも他人と一緒に仕事場の物置の中。なるほど、そもそもお風呂という最もプライベートな空間を他人と共有しているくらいなのだから、食べるのも寝るのも同じように他人と過ごすことが当たり前という生活もあるだろうなと思いました。別府は今でもお風呂上がりは半裸の格好で道を歩いているお爺さんなんかがちらほ

らいる町なので、そもそも内と外との間に壁がないまま生活するような感覚の人たちがいたのも納得できます。

混浴温泉世界

『in BEPPU』は別府で毎年開催される個展形式の芸術祭で、僕は2020年度の招聘アーティストとして作品『O滞』を発表しました。今年度（2021年度）は服飾デザイナーの廣川玉枝さんの個展『廣川玉枝 in BEPPU』が開催されますが、同会期で『O滞』の再公開も決定しています。『O滞』はもともと会期を限定しない展覧会として制作した作品です。構造的に開催が可能であったことから、主催する混浴温泉世界実行委員会からの提案を受けて、再公開を決めました。

混浴温泉世界実行委員会とは長くて言いづらい名称ですが、ときどき別府市民や支援者たちから猥褻だという批判を受けることがあるそうです。それでもこの名前で活動をし続ける理由として、おそらく組織の態度表明のような意図もあるだろうと僕は勝手に想像しています。喫茶店のマスターの話にあったように、史実としての混浴文化があったこともひとつの由来でしょうが、さらに重要なのは、今の別府が、流入者たちによって形成された都市であるということです。明治以降、四国や本州からの流入者たちによって温泉観光都市として開発され、第二次世界大戦後は、日本の植民地からの引揚者や、他県の戦争被災者たちが多く流入してきました。逃れてきた罪人や債務者も少なくなかったそうで、この多様な人々を受け入れて発展してきた町が別府であり、人々が集まった中心に、まあるい円形の温泉があった。これをメタファーとして混浴温泉世界と名付けた。実際に名付けたのは『混浴温泉世界』の当時の総合ディレクターであるP3 art and environmentの芹沢高志さんで、僕はご本人からこれを聞いたわけではありませんが、作品の制作中にリサーチしたことや、実行委員会の面々がちょくちょく口にしていたことを参考にすると、僕の解釈はそんなに間違ってないはずです。たぶん。

地獄（書籍『O滞』からの引用）

『つるみ小唄』の歌詞には「下は極楽、上地獄」というフレーズが登場します。別府では地獄という言葉に、仏教における最下層の世界を意味するのとは違ったイメージや距離感が存在していて、例えば、温泉の蒸気で食料を蒸して食べる調理法を「地獄蒸し」、蒸気の吹き出し口を地獄と呼ぶ変わった習慣があったりします。

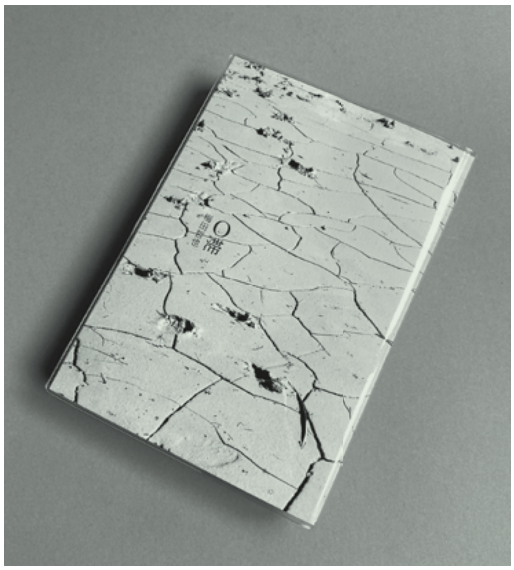
一方で、人が住みづらいような、人工物をよせつけない超自然的な景色がある場所のことを地獄と呼ぶ場合があり、有名な「地獄めぐり」もこれらの資源を観光地化したものです。しかし、ミネラル成分の影響で色がついている湯池や間欠泉のことを地獄と称していながら、それぞれの会場は安全かつ合理的な運営で管理され、場内には流行曲がBGMとして流れていたり娯楽的な演出が施されたりして、従来の意味合いとはやや離れてしまっています。そういった意味において、『O滞』のラジオ音声の会場になっている「明礬池」や「塚原温泉 火口乃泉」では、今も本来の「地獄」そのままの姿を見ることができます。

明礬池は、地球物理学者の由佐悠紀さんが案内される町歩きツアーに参加したときに初めて訪れた場所です。中心の大きな池を小さな3つの沼が取り囲んでいるのですが、この3つは増水して池のような姿をしていることもあれば、水が干上がって泥がぶくぶく泡を立てているだけのときもあったり、訪れる度に全く違う様相を呈しています。受信するラジオ音声はどれも池や地面の内部にマイクを入れて録音したもので、いっさいの加工を施していません。録音したのは秋から冬に差しかかる静かな季節ですが、枯れた風景とは裏腹に、水中は途切れることなく豊かな表情をもって躍動していることに驚きました。由佐さんのお話だと、もしこの一帯が、池から絶えず噴出する炭酸ガスや硫化水素が澱んでしまうような地形であったとしたら、それは、いわゆる鳥地獄のような場所となっていただろうとのことでした。

荒涼とした景観の塚原温泉がある火山一帯は、場面④のバスで満島さんが歌う「断層崖に挟まれて、湯煙広がる扇状地」の扇頂、「北にあります鉄輪と 南に堀田、朝見川」二つの断層を延長した先の交差するポイントに位置しており、別府のお湯はここから始まって、別府八湯へと広がっていきます。別府温泉の泉質は山間部へ上昇していくに従って酸性成分が多くなるそうで、明礬池あたりから強酸性の泉質となり、塚原温泉は日本でも有数の酸性泉として知られています。1980年代に別府明礬橋が施工される際には、アルカリ性成分からなるコンクリートを使用するために、硫化水素と強酸の温泉水が噴出する土壌に対して約8年間もの現場実験がおこなわれたのだそうです。この話に象徴されるように、地獄は人工物と相性がよくないばかりでなく、はっきりと人の生活を蝕んで破壊していく一面を持っています。そんな地獄の湯に浸かり、地獄で蒸した材を食する、地獄と密着した生活が、別府という町を豊かにしているのです。

上記の文章は拙著『O滞』（発行：特定非営利活動法人BEPPU PROJECT／制作・発売：T&M Projects）からの引用です。「明礬池」や「塚原温泉 火口乃泉」は『O滞』の会場となった場所の名称で、『つるみ小唄』は、作品内で使用されたモチーフのひとつです。

ここからは、別府で発表した『O滞』の制作を振り返りながら、上記の引用文のなかで記した「地獄」に象徴されるような、別府という町の特異性について書いてみようと思います。



書籍『O滞』表紙
提供：Calamari Inc.

塚原温泉 火口乃泉の風景　photo: 天野祐子

観光業が収入の9割を占める町

別府の産業は観光業が全体の9割を占めます。コロナ禍の影響で昨年度の観光客は前年から激減し、町の収入は過去最大の打撃を負ったと言われています。この状況下で新作を制作し、発表しました。僕の場合、制作においては特に苦労もなく、わりと普段どおりやれたのですが、発表の準備段階で、必要な手続きとしてやっかいな問題が生じていたことは、世界中どこにいても似たような状況なので、本文の読者であれば具体的に書かずとも想像に難くないはずです。ほとんどの催しは集客の安全面が問題視され、僕が出展／出演を予定していた企画も、軒並み中止か延期の判断を余儀なくされていました。

そんななか、『in BEPPU』は例年どおり、予定どおりのタイミングで、むしろ通常よりも長い会期を設定して開催されました。この判断は、僕が別府という町の「人」だけではなく「土地」の声を聴きながら制作したことに起因していたと思います（とか言うと抽象的な話をしていると思われてしまいそうですが、実際にリサーチ段階から地中の音を録音して回っていたので、声を聴くという言い回しはある種の比喩として受け取っていただきたい）。それは観光産業が停止して人と人の間に物理的な距離を求められるような状況にあっても、変わらず躍動しつづける強大な大地のエネルギーがあったということ。つまり「地獄」です。

現象としての今を表現する

僕の作品では、作品を制作し発表する「場」が主となることがほとんどです。人はそこにどう関わるのかというと、演者だけでなく観客も含めて、「場」と作品をつなぐ媒介として存在しています。稀に例外はあるにせよ、人を主に置いた場合、ひとりが一生のうちに表現できることなんてたかが知れていると思いますが、「場」が持つ時間軸は、ときに人のそれとは比較にならないほど膨大なので、「場」を主とした場合、自分という存在は、大きなうねりとしての表現軸にちょっとだけ加担している、たまたま一瞬の閃光に居合わせただけの存在にすぎないのだと感じられ、作り手としての自分自身もまた、一介の媒介としての役割に取って代わるのです。より身近な例で言い換えると、「演じる」行為が自分以外の存在を代弁することであるならば、演劇における人もまた媒介である、と言えるようなことです。

人の手に負えない自然

温泉が観光資源であるというのは人を主にした場合の話であって、「場」を主と捉えてみると、温泉が持つ、人の手に負えない自然としての姿が見えてきます。別府は温泉を観光に利用することで経済的に発展しましたが、これは近代以降の話であって、かつて温泉は病や傷を癒す一方で、農作や鉱業の面で産業を阻み、人々の生活を圧迫していた時代もありました。また、温泉は建築との相性が悪いミネラル成分も多く含んでいるため、建物を傷めている姿も町のいたるところで散見されます。どんなことにも多かれ少なかれ両義性はつきまといますが、別府の温泉は「場」としての力が強すぎて、負の側面が剥き出しのまま可視化されて存在しています。だからこそ「地獄」が生まれるのであって、このような概念が存在し続けているのは、「場」を主語にした大きなナラティブが、人々の生活を通して感覚のなかに息づいているからではないでしょうか。ただ、感覚はときに目先の論理に負けてしまうことがあります。その結果失われてしまったもののひとつに、別府の「砂湯」があるような気がしています。

「砂湯」は、熱い砂に身体を埋めて湯治する、別府の名物温泉のひとつです。現在は、温泉が湧くところに砂を運んで人工的に復元したものしか存在しませんが、別府にはかつて、長く伸びた砂浜の海岸線と、掘れば湯が湧く天然の「砂湯」が存在していました。計画的に今のような観光都市になっていく以前の別府では、旅行客といえば、怪我や病気を治しに近隣の地域から湯治に訪れる人がほとんどでした。しかし、明治終わりから昭和初期にかけておこなわれた市区改正事業で埋め立て開発が進み、国道が走り、大型のホテルや温泉宿が建設される一方で、砂浜はすっかり姿を消してしまいます。別府が観光都市として発展してきた経済史観に基づいて振り返れば否定されることではないのかもしれませんが、もしも当時の都市開発において人の声よりも土地の声を優先させる判断があったとしたら。もしもこの砂浜が現在も存在していたら、どんなに素晴らしい景色が広がっていたかを妄想してしまいます。一介の余所者の無責任な感想かもしれませんが、人は目先の利益を優先させた結果、「場」にとって大きな損失を与えてしまったように悔やまれてなりません。

今あるものがいつか失われてしまうことは避けようがないのかもしれませんが、主として存在する「場」に人が作品という杭を打つことで、失われていく現在地としての「今・ここ」を私たちが強く意識すること

明治末期〜大正初期の別府的ヶ浜　提供：小野 弘［別府の歴史研究］

は可能です。コロナ禍においては、人と人との間で行動を制限される／抑圧される状況があらかじめ共有され、理屈ではなく実感として存在していたので、想像上での説明が不要であるという意味においては、「場」を主とした作品づくりがやりやすい環境であったとも言えます。実践すべきは、有事にこそ作品について悩み、可能であればつくり、後世に伝えることだと考えます。後世に伝える／残すための最も手っ取り早い手段は、やはり発表することです。コロナ禍以降、オンラインの需要が高まっていますが、ここでは発表の場としてのオンラインの可能性については言及しません。むしろ個人的には、クリエーションの段階でオンラインのツールを有効に利用することで、現実世界を舞台に作品を発表する可能性も広がると考えているので、『O滞』は、今の状況に見合った、発表しやすい形態の作品を制作することにしました。

『O滞』の再公開

『O滞』は、地図とラジオ音声を手掛かりに数カ所を巡る回遊型の作品です。会場にはその場所そのものの環境があるだけで、作品のために用意した造形物が存在しません。回遊する会場として設定したのは全部で12カ所。基本的には全ての会場が屋外です。別府ならではの特徴的な地形や空間ばかりではなく、普段は人が認識していない場所や、立ち入らないような場所、そもそも到達することが不可能に近いような場所も含みます。

また、これらの会場を舞台に撮影した映画『O滞』を制作して、町の劇場で公開しました。町を回遊した鑑賞者は、ラジオと地図に導かれて訪れた場所に、映画『O滞』のなかで再び出会うことになります。あるいは映画を先に体験した人にとっては、映画で登場した場所をリアルに訪れる巡礼の旅になるかもしれない、といった内容の作品です。

2021年12月からの再公開に際して、新たにインターナショナル版として、昨年度と同じキャストで英語のラジオ音声を制作しています。英語と言ってもネイティブの英語ではなく、世界中で最も話されているような、ブロークンな英語です。先述したように、第二次世界大戦後の別府には、日本の植民地からの引揚者が多く移住しただけではなく、アメリカ進駐軍の巨大なキャンプが10年間存在しました。また、2000年に開校した立命館アジア太平洋大学（APU）では学生総数のうち約半数を留学生が占めており、近年はインバウンド需要でアジア系の観光客も多いため、土地に根付いた作品にするには他言語に翻訳する必要があるだろうと考えて、英語版の制作を決めました。また、先に引用した書籍の出版も今年度から作品に加わる新しい展開のひとつです。作品と同じタイトルで、展覧会のカタログではなく、昨年度制作した映画と同じようにあくまで『O滞』の連作のひとつとして制作しています。今年度もまだまだ物理的な移動が制限される状況は続いていますが、昨年度の会期中はとくに他所の人が作品を体験するには難しい状況にあったので、作品の一片が物質ごと流通するメディアとして、本という形を選択しました。発表の場としてのオンラインには言及しないとさっき書いたところですが、ひとつだけ言うならば、公演のオンライン配信にはバラバラの空間に存在する観客同士が体験を共有するためのアイデア・観客の行動を抑制するための装置が前提として必要であると僕は考えていて、そこに創意工夫を凝らさないのであれば、読書のほうがよっぽど密度の濃い体験を提供できるような気がしています。

梅田哲也 イン 別府『O滞』制作の風景 photo: 天野祐子

梅田哲也 イン 別府『O滞』映画上映の様子 photo: 天野祐子

いずれにしても、展覧会の会期が終了しようが、本が古くなって紙がチリチリに破れようが、去年から今年にかけて『O滞』という作品の杭が打たれたであろう「場」そのものは、姿を変えながらも私たちの寿命より遥かに長く存在しつづけます。別府の湯もいつかは全部枯れてしまうかもしれませんが、少なくとも私たちがいなくなるよりずっとずっと後のことでしょう。今は感染予防のためなるべく移動を避けたいと考えておられる方も、そのうち自分の判断が許すタイミングで行ってみてはいかがでしょうか。作品が枯れた後でも、地獄の声を聴くことは出来るのかもしれません。

梅田哲也（うめだ・てつや）

建物の構造や周囲の環境から着想を得たインスタレーションを制作するほか、パフォーマンスでは、普段行き慣れない場所へ観客を招待するツアー作品や、劇場の機能にフォーカスした舞台作品、中心点をもたない合唱のプロジェクトなどを国内外で発表。2019-2021年度セゾン・フェロー。近年のパフォーマンス作品に『Composite: Variations/Circle』（Kunstenfestivaldesarts、2017）、『INTERNSHIP』（国立アジア文化殿堂、2016／TPAM 2018）など。個展では『うたの起源』（福岡市美術館、2019-2020）、『See, Look at Observed what Watching is』（Portland Institute for Contemporary Art、2016）など。『O滞』再公開の会期は2021年12月18日〜22年2月13日。https://siranami.com/

02

太田信吾
Shingo OTA

「継承」の危うさから逃れるために——変わりゆく温泉街と芸者文化の衰退

温泉街の芸者文化が直面する課題

コロナ禍において、日本政府によって発出された緊急事態宣言は多くの業種に経済的な打撃をもたらした。私が関わる映画や演劇の業界でも、多くの関係者が仕事の中断や中止を余儀なくされた。幸い、文化庁や助成財団などからの経済的な支援の施策が打たれ、これらによって助けられ、アフターコロナの世界でも文化芸術に関わる希望をかろうじて見失わずにいられた関係者も多いと思う。一方で、解体や閉館の道を選んだ文化芸術に関わる組織、劇場、映画館もある。

今年の5月に解散した「戸倉上山田温泉」の上山田戸倉温泉芸寮協同組合もその一つである。芸寮協同組合とは個人事業主であるその土地の芸者たちをマネジメントする「置屋」を束ねる組織のことであり、ここは長野県でも唯一残っていた芸寮組合であった。長野県でも有数の歓楽街を兼ね備えた温泉街で、昭和33年(1958年)に設立され、63年に渡って温泉街に華を添えてきた芸者文化がなぜこのような事態となっているのか?

私は、戸倉上山田温泉を有する長野県千曲市に生まれ育ったことから幼い頃から芸者文化を身近に接してきた。また城崎温泉で今年(2021年)の7月に志賀直哉による湯治場を舞台にした短編小説『城の崎にて』の映画化をさせていただくなど温泉街との関わりを深めてきたこともあり、必然的に、その現実と課題を見つめ、今後、自らの創作活動に反映させていきたいという思いを抱くようになり、各地の温泉街へ出向き、芸者文化に対する取材を始めた。

上山田戸倉温泉芸寮協同組合の代表を務めていたのは自ら芸者としての活動も続けている山本栄子さん(83)だ。

「やめないで、と色んな人から言われましたけれどもね、組合の運営もままならなくなっていってね。時代ですよね、もう仕方なかったんですよ」

開口一番、栄子さんはこの業界の厳しさを口にした。

戸倉上山田温泉において、芸者を呼ぶためにかかる料金は1席あたり二時間制で1人18,000円。栄子さん率いる芸寮協同組合(業界用語で見番とも呼ばれる)が各置屋からの組合費の管理の他、芸者を呼んだ団体や旅館への伝票の作成、集金、各置屋へギャランティの分配などを担当していたが、コロナ以前から会社の宴会などが温泉街で催される機会も減少の一途を辿り、仕事は減っていた。そんな厳しい状況下でも、社会奉仕を理念に掲げる地元のロータリークラブやライオンズクラブなど、大手の企業や団体から地元で宴会を催す時に芸者を呼んでもらうこともあったが、コロナによる宴会自粛が経済的な逆境に追い討ちをかけた。

「そもそも芸者になるためには資本金がかかるでしょう。稽古のための月謝、着物代、お座敷ごとの美容院代、交通費……それを回収することすらままならなくなっちゃってね。20年くらい前まではお座敷に出ると必ずご祝儀をもらったり、昔はタクシーの運転手さんに『お釣りはいらないよ』なんて言ってたものだけどもね。そんな羽振りの良い時代ももう終わってしまった」

栄子さんが憧れていた芸者の世界

幼い頃から近所に住んでいた芸者さんからの誘いで栄子さんは「おさらい会」という芸者さんの集いを見に連れていってもらい、華麗に舞や唄を披露する芸者の姿に憧れていつか自分も芸者になりたいと感じていた。中学を卒業した栄子さんは知人の縁を辿って長野でも栄えていた戸倉上山田温泉へ。憧れの芸者文化が根付く町へと引っ越した栄子さんだが、もちろんすぐに芸者として仕事をスタートできるわけではない。今でもデビューは18歳からというルールがある。栄子さんがデビューした頃の上山田温泉では、芸者の数も、それを目指す若者も多く、芸者たちは芸の技量によってA級、B級とランク付けをされて各置屋に配置されていた。その審査を担当したのがやがて栄子さんも働くことになる「見番」と呼ばれる組合組織である。見番は現役を引退した芸者がなることが多く、熟練の芸者たちによる審査を潜り抜け、栄子さんは見事A級の芸者としてデビューを果たすこととなった。

「温泉芸者—信州別所温泉—」より photo: 平地勲

芸者文化最盛期の戸倉上山田温泉(総勢約300名の芸者)

デビューした芸者たちはまず立ち方（踊り手のこと）として経験を積む。芸者が一人でお座敷に出向くということはなく、立ち方・歌い方・楽器方の各パート合わせて最低でも五人一組となって宴会が催される会場へと出向く。宴会の種類は豊富だが、企業や団体による大人数の宴会から、こぢんまりとした宴席まで様々だ。

おおよそお座敷における芸者の仕事は「晩酌」「芸の披露」「宴会芸」と三分される。

まず宴席に到着すると、宴会を楽しむ客たちにお酌をして回る。ここでは客が主役であり、決して芸者たちはお酒や食べ物はいただかない。食事が進み、客たちにお酒も回ってきた頃合いを見計らって芸者たちがまず芸を披露して場に彩りを添える。演目は四季折々、その時節や宴席に応じて日々変化する。芸の披露が済むと、今度は宴席の客たちも交えたお座敷芸の時間となる。ここまでで大体1時間1セットとなっている。その後、延長となるケースもあれば、そこでお開きとなる場合もある。

連日連夜、栄子さんが働く上山田温泉では昼間は稽古に勤しむ芸者たちの歌声や三味線、太鼓の声などが路地裏に響き渡り、夕方になると温泉街に向かう芸者たちの華麗な姿が、夜になれば宴会を楽しむ人々の声や三味線、太鼓の音が温泉旅館から漏れ聞こえるなど、芸者文化はこの街の風物詩として日常に隣り合わせとなって存在していた。芸者になるためのお稽古代や着物・かつら代などの初期費用も、すぐに返済できるくらいに経済的にも安定しており、多くの芸者たちが置屋からもらう給料には手をつけずに宴会ごとにもらえるご祝儀だけで生活ができた時代が長く続いていたという。

そんな晴れやかな芸者の世界にも、厳格なルールがある。その中でも栄子さんが最も大事だったと述懐するルールが「お座敷で客から聞いたことを他言しない」という守秘義務である。今では多くの企業も社員に徹底しているルールであるが、お座敷では客と密室空間において至近距離で関わり、酒に酔ったはずみで客の間で機密情報などが飛び交うことも多く、それが決して外部に漏れないように芸者の世界では注意することが重要視されていたのだという。芸の上達はもちろんのこと、そうした人間的な素質が客から評価され、信頼を得た芸者たちが指名でリピートしてもらえるようになっていく。芸者としてのデビューという夢の第一関門を突破した栄子さんは次なる目標を「良いお客さんからのご指名を増やしていくこと」と設定。その実現に向けて、連日、朝からの稽古と夜のお座敷という本番を重ねて経験を積んでいった。

お座敷文化によって、少しずつ育まれた栄子さんの人生哲学は組合の会長として多くの芸者たちを率いる立場になったあとも役立ち、それらを後身たちに伝えていった。

「私が育てた芸者たちはみんな幸せにやっていますよ」

衰退する芸者文化と直面する課題

栄子さんが人生を掛けて向き合ってきた芸者文化はなぜ今、衰退の一途を辿っているのだろうか？

「もう30年前からね、その予感はありましたよ」

かねてより芸者文化をはじめとする古典芸能に耽溺してきた芸能愛好家の酒井靖さん（54）は、悲哀を交えた表情で懐かしい光景を振り返る。埼玉県さいたま市で生まれ育ち、平成5年（1993年）に25歳で結婚をした酒井さんは、映画鑑賞などを通じてかねてから興味を持ち、一度は生で味わってみたいと思っていた芸者を自らの結婚式の際に呼んだ経験を持つ。式を開いたのはさいたま市大宮にかつてあった東山という料亭の座敷。

「まずお酌してもらってね。そのあと、小唄と三味線に合わせて、お祝いの舞と唄をやってもらったんですよ。若い芸者さんを想像していたんですけどね、到着した芸者さんたちに玉代（ぎょくだい）（芸者へのギャランティのこと）を入れたご祝儀袋を渡しながら挨拶をしに行ったら、芸者さんたちがみんな、60代以上でさあ……ああ、これは芸者さんの世界にも高齢化の波が来ているんだなあと実感したのを覚えてますよ」

酒井さんはかつて結婚式を開いた料亭を訪ねてみたところ、すでに解体され更地になっていたという。

「寂しかったよね。思い出の場所や好きな文化がなくなるっていうのはさ。でも芸者文化を楽しもうにも、今は身近なところに芸者さんを呼べる箱がないから呼ぶに呼べないよね」

芸者文化の成立に必要不可欠な旅館は芸者文化に対してどのような思いを抱いているのだろう。信州最古の温泉といわれ、「信州の鎌倉」などの愛称でも親しまれるほど天然温泉だけでなく国宝や重要文化財などの歴史的建造物が多数残っている長野県の「別所温泉」を訪ねると、旅館側の事情や工夫も見えてきた。別所温泉で源泉100%かけ流しの温泉を6種類の湯殿で旅行者に提供している「上松や旅館」もかつては宴会のたびに芸者さんを呼んでいたが、近年、芸者さんを呼ぶような団体客向けの宴会に使っていたフロアを朝食会場へと改装した。ここは代々続く家族経営の旅館で、父で現会長の倉沢章さん（70）から息子の倉沢晴之助さん（40）に社長が代替わり

芸者文化最盛期の別所温泉「温泉芸者―信州別所温泉―」より　photo: 平地勲

したタイミングでの変わる時代のニーズに合わせた経営判断だった。会長の倉沢章さんを訪ねると、苦渋の判断を迫られていたことが伝わってきた。

「幼い頃から別所温泉で生まれ育ってきたからね、芸者さんっていうのはとても身近な存在でしたよ。自分も宴会に参加する側の時は芸者さんと野球拳なんかをしたりしてね。楽しかったなあ。近くにストリップ小屋もあって、小学生の頃は僕が照明係を手伝ったりしてましたよ。その行き帰りに芸者さんとすれ違ったりしたりしてね。でも僕が旅館の社長になったあと、今から20年くらい前からかなあ、芸者さんではなくコンパニオンさんを呼んで欲しいっていう声の方がお客さんから増えていって」

刻一刻と時世や変化する観客のニーズに直面する旅行業界。最近ではコンパニオンを呼ぶ宴会そのものが激減しているのが現実だという。

「年に数回しか使わない宴会場を残しておくのは経営的にも難しくてね。大広間はフローリングに工事して、テーブルを置いて朝食会場やレストランに使えるように改装したんですよ。こじんまりした宴席には使えるように小さい畳の部屋は1室だけ残してね」

今年創業152年を迎えるこの旅館が、経営者の代替わりをして掲げた経営フィロソフィーは〈旅の想像、宿の創造〉。かつては大手の旅行代理店が旅館にとってはマネジメント的な存在で、企業の慰安旅行や学校の修学旅行など多くの案件が代理店に依存する時代が長く続いたが、いつの間にか代理店の力は弱まり、現在、上松や旅館の75%はインターネットの代理店を通じた個人による予約だという。現在、そうした顧客の変化を踏まえて、旅を楽しんでもらおうと旅館独自の企画を多々打っている。私が上松や旅館を訪ねた今年の10月27日は松茸シーズンの最盛期。近隣の松茸のレストランなどと連携して松茸収穫を旅行者が楽しめるプランなどがあった。中でも2016年に放映された大河ドラマ『真田丸』の主人公である戦国時代の武将・真田幸村の部屋を再現し、旅行者が時代劇の世界にタイムスリップできるユニークな部屋は大人気で、予約が途切れない状況が続いているという。私が宿泊させていただいた日も、中高年世代を中心に宿はほぼ満室。旅館の経営判断は変革する旅行者のニーズを見事に捉えているようである。

それでも、かつて芸者文化を味わった経験を持つ高齢の世代からは未だにお座敷文化のニーズがある。

戸倉上山田温泉より先に見番や置屋が消えた兵庫県豊岡市の城崎温泉で暮らす温泉街最後の芸者、秀美さん(75)は独自に特別老人ホームなどへ慰問し、芸の披露や入所者とお座敷芸を楽しむ活動を続けている。

若手を育てようとボランティアで若い世代に稽古をつける機会も持ってきたが、どうしても皆すぐにやめてしまうという。

「自分が愛して続けてきた文化ですからね。この町を舞台に『城崎情話』という曲を作ってくださった作詞家の、もず昌平さんと約束したんです。最低三人は後継者を育てると。そうしたらもずさんが私のためにまた曲を作ってくださると。でもまだその約束は果たせていません」

芸者文化の継承に焦燥感を抱えた秀美さんもおそらく強力な味方に感じるであろう一人の若手芸者さんと出会った。福島県会津若松の東山温泉の芸妓、花の家・真衣さん(34)だ。

彼女はコロナ禍に仕事が激減した最中、芸者文化の世界を発信していきたいとフランス人のジャーナリストからドキュメンタリー映画の制作の相談を受けたことがきっかけとなり、今自分がいる業界が抱える衰退という課題を乗り越えたいと日本各地の芸者文化の取材を自らもスタートさせた。

京都を例に挙げて紹介すると京都には祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、総称して五花街と呼ばれるこのエリアに芸者文化が根強く残っている。「おおきに財団」と呼ばれる公益財団法人が行政や大手企業の賛同を得ながら五花街の保存と伝統芸能の保存継承のために活動をしている。コロナ禍中に仕事が激減した芸者達を支援するためのクラウドファンディングも立ち上げて、606人の支援者から1,300万円以上の支援金を集めるなど、コロナ禍に仕事が減ったことによる芸妓・舞妓の減少を食い止めるための組織的な活動が行われていた。旅行代理店が販売するツアーのパッケージにもお座敷文化を味わえるコースが組み込まれるなど、官民一体となった取り組みが行われていた。

真衣さんはそうした一部地域の組織的な支援の形を知る一方で、ギリギリの状態で続いている厳しい現実も目の当たりにしてきた。たとえば熊本では今年88歳となる最後の芸者・あや子姐さん(福岡民謡の『黒田節』で文部大臣賞を受賞)が病で倒れながらも代わりの芸者がいないと病床から復帰し、現役として舞台に立ち続けていた。ところが熊本地震の後あたりから体調を崩し、現在は舞台に立つこともままならない状態に。あや子姐さんと長年の付き合いがある料亭・おく村の社長の奥村さんは「あや子姐さんが引退するときは最後の花道はうちの座敷で見送ってあげたいと思ったが実現できておらず残念だ」と無念さを口にしつつも、まだその野望は諦めていない。

芸者文化が根付き存続している地域と、潰えてしまった地域の違いについて尋ねると、真衣さんはゆっくりとした口調で語ってくれた。

「やはり芸者文化はお客様があって成り立つものですから。お客さんが育たないことには芸者文化も残っていかないですよね。ご理解あるお客様は若い人たちが芸者離れしないように、未だに気をつかって会合とかに芸者を呼んでくださろうとしますよね。ただやはり宴会があってもコンパニオンさんの需要の方が増えてきている状況は変わらず。芸者文化の楽しみ方をより多くの人に知っていただく機会を作れるかが喫緊の課題かなと思いますね」

母・祖母ともに芸者という家庭に生まれ育ち、自身で3代目となる真衣さんは芸者文化の次世代への継承を目標に掲げ、積極的に活動をしている。芸者文化についての講演会や新聞での連載、サロンの開催、行政との連携など外部への発信活動の他、芸者という仕事をより続けやすい職業にしていこうと福利厚生について学び整えるなど内部環境の調整も積極的に励んでいる。

継承という言葉への違和感

文化の継承に対して批評性を持ちながら自らのお仕事に励む若い芸者・真衣さんの存在に私は救われた気分だった。というのも、正直なところ、どこかで「継承」という言葉を聞くたびに、閉塞感や盲目性を感じることが多かったからだ。それが義務になった時点で、踊りは、踊りでなくなる。踊りとは心が踊るから踊りなのであって、文化として残るから踊りがあるのではない。実際に私は世界中を旅してきた中で、路上の名もなきひとが奏でる歌に、サックスの音色に、花が揺れ、雲が流れる景色に、心を踊らされてきた。経済や技術よりも心が踊りに先行する。お話を伺った栄子さんや秀美さんが若かりし頃に無我夢中で芸に励んでいた頃は継承という言葉などは頭の隅にもなかったはずだ。「とにかくそれが自分のやりたかったことだから頑張れた」と彼女たちは私に語ってくれた。つまり心が先に踊っていたのだ。

だからこそ、今、芸者遊びさえ知らない若い世代に無理な継承を求めるのには慎重にならねばならないのではないか、そこに無理が生じてしまう可能性が高いのではないかというのが私の考えである。それでも、私が芸者文化に惹かれ取材を続けている理由は、第一に、映画や演劇の、消えゆくものを残すメディアとしての側面を信じているから。実際に私はこれまで映画監督としてデビュー作となるドキュメンタリー映画『わたしたちに許された特別な時間の終わり』では自殺した音楽家の友人の姿を、二作目の劇映画『解放区』では、解体・変遷を遂げるドヤ街の釜ヶ崎を、フィルムに焼き付けてきた。時を経るごとに、自分にとって大切な人や景色が、今もまだ映像を通じて立ち上がる、ということの重みが増している。お座敷芸や芸者遊びを幼少期に体験したことがある私は自分のルーツでもあるそうした時間を、心身を伴って残したいという思いがある。そして第二に旧態依然としたシステムがまだ残る芸者文化には多大で批評的な視座を持ち込む余白を感じるためである。「フジヤマ」「ハラキリ」「ゲイシャ」……飛行機などに乗っていると、インバウンド向けの広告には未だにそうした画像が日本の古き良さとして美しい映像で喧伝されているが、そこに伴う危うさに目を瞑って放出されるオリエンタリズム、ジャポニズムに私は心動かされることはない。

私は来年（2022年）、芸者文化に着眼したうえで、その背後にあるジェンダーギャップや労働問題など、文化芸術にふだんは関わらない方々でも向き合わざるを得ない時代の変化も取り入れながら、なぜ芸者文化は潰えているのか？ 潰えさせてしまって良いのか？ 批評性を持って芸者文化に自身も身体を張って向き合い、演劇作品に昇華させる予定である。

長年芸者さんが暮らした建物をリノベーションした「タロウ珈琲 弐号店」

様々な継承の形

最後に、芸の継承ではなく、かつて置屋として使われていた建物の継承という形で、芸者文化の痕跡を守っている人をご紹介したい。温泉街を有する長野県下諏訪町で「タロウ珈琲 弐号店」を経営する安田妃佐さんだ。大阪から2012年に結婚を契機にこの町に移り住んだ安田さんは町づくり事業に関わったあと、2015年にかねてからの夢だった自分のお店を出すべく物件を探している際に現在店舗を構えている物件と出会った。栗の木を建材にした築100年のその物件が気に入った彼女は即契約。後日、その物件が、下諏訪温泉で最後の芸者さんが最期まで暮らし置屋としても使われていた物件だったことを知らされる。目と鼻の先にある「衣紋坂」には元赤線地帯もあり、最盛期には100名以上の芸者がこの温泉街に暮らしていたという。

> 「その事実を知っても特に驚きはなかったですね。人が集まれる居心地良い場所を託されたような気がして、置屋としての雰囲気は崩さずに私も皆が集まれる場所を作ろうと心が引き締められる思いがしたのを覚えています。歴史も好きなので芸者文化に関わる建物を引き継げたのは嬉しかったですね」

京都で大学在学中に芸妓さんが経営するクラブで接客の仕事をしていた経験もあったためか、芸者さんが暮らした建物に自然と親近感を感じた。彼女は入居に際しては壁に漆喰を塗り、一部、カウンターを増設した程度で、障子はそのまま使用するなど大きな改修は施さず、建物を使っている。コロナ禍に一時休業をしていたが、間も無く営業再開予定だ。

撮影現場より

太田信吾（おおた・しんご）

1985年生まれ。映画監督・俳優として活動。長野県出身。大学では哲学・物語論を専攻。大きな歴史の物語から零れ落ちるオルタナティブな物語を記憶・記録する装置として映像制作に興味を持つ。処女作の映画『卒業』がイメージフォーラムフェスティバル2010優秀賞・観客賞を受賞。初の長編ドキュメンタリー映画『わたしたちに許された特別な時間の終わり』が山形国際ドキュメンタリー映画祭2013で公開後、世界12カ国で公開。俳優として演劇作品のほか、TVドラマ等に出演。最新作の映画『想像』『サンライズ・ヴァイブレーション』が公開中。『フードトラッカー峯岸みなみ』WOWOWにて放送中。出演作に岡田利規 作・演出『未練の幽霊と怪物』『三月の5日間』など。2022年、演劇作品『城崎温泉、最後の芸者たち』の発表を予定。
https://www.hydroblast.asia/

03

石川理夫
Michio ISHIKAWA

《よみがえり》と《創造》の泉としての温泉地

滞在する場としての温泉地

古来、人は温泉に何を求め、温泉地でどのように過ごしてきたのだろうか。その求められ方と過ごし方から、温泉とそれを基に地域の人々が時間をかけて育んできた〈温泉地〉という場の存在意義が見えてこよう。

日本の文献に初めて温泉（地）が記されるのは、奈良時代初めの712年に成立した『古事記』で、「伊余湯（いよのゆ）」（道後温泉）の名が唯一出てくる。しかし温泉で病が癒えた、といった明るい話ではない。允恭（いんぎょう）天皇の容姿佳麗な皇太子が、美しい同母妹・軽大郎女（かるのおおいらつめ）との禁断の兄妹相愛を指弾されて流刑となった先として登場する。允恭天皇は中国の史書に記録された倭の五王のうち「倭王済」に比定されるので、5世紀半ばのこと。

それが8年後に完成した『日本書紀』では初の正史としての立場ゆえか、皇太子ではなく軽大郎女のほうを伊予に流したとする。『古事記』の話はもっとリアルでドラマティックだ。別れを悲しむ二人は歌を詠み交わす。恋い焦がれる軽大郎女は「君が往き　日（け）長くなりぬ　山たづの　迎へを行かむ　待つには待たじ」（後の『万葉集』にも収録）と詠んで後を追う。伊余湯で二人は再会した。どれほどの日々を一緒に過ごせたのか。『古事記』は最後に「共に自ら死にたまひき」とのみ記す。

日本で初めてかいま見えた温泉（地）は悲劇の舞台であった。これには訳がある。一般人の流刑、島流しと異なり、皇（王）族の場合にはそれなりの受け容れ施設が必要である。温泉地には当時すでに施設が備わっていた。『日本書紀』は飛鳥時代に「伊与（余）湯」に仮御殿「伊予温湯宮（いよのゆのみや）」があり、639年に舒明（じょめい）天皇が温泉行幸して4か月間滞在したと記す。また、それ以前の「法興六（596）年」には厩戸王（うまやとのみこ）（聖徳太子）が側近らと訪れ、「神井」（泉源＝湯元）を観て、温泉の効果を讃える碑文一首を作ったことが史料からうかがえる。このときおそらく仮御殿を利用したのではないか。

温泉に出かけても日帰りか一泊という昨今からは想像もつかない。しかし戦後も高度成長時代頃までは、保養や湯治を問わず1週間はみな逗留していた。夏目漱石は大学入学前に眼病を治そうと、「目の湯」で知られた箱根の「姥子の湯」に2週間逗留したことを『吾輩は猫である』で登場人物に語らせている。

温泉療法で効果を見るには、人に備わる総合的生体調整作用（ホメオスタシス）もあって「一回り（1週間）」単位で基本「三回り（3週間）」の湯治滞在期間が必要という理解が、経験知により世界共通で確立していたことも見落とせない。温泉地は何より人がゆったり滞在する場なのである。

人が集い、宴し、歌い踊る温泉地

一方、庶民はどう過ごしたのか。奈良時代初めに朝廷は、諸国の風土の実情を調べて報告するよう国司に命じ、国ごとに『風土記』が編纂された。唯一完本として残るのが733年完成の『出雲国風土記』で、温泉地が4か所ほど登場する。有名なのが現在の松江市玉造温泉の紹介文である。

漢文で「…日集成市、繽紛燕楽」と記述するくだりは、「…日々集まって市を成し、歌い乱れて酒宴をひらく」と現代訳（『新編日本古典文学全集5』）される。川辺に湧く温泉を求め、老若男女問わず大勢の人が毎日集まるので、市が立つほど賑わっていた。人々は湯浴みしては温泉の効果を実感し、「神の湯」と崇めて恵みに感謝し、浴後は酒宴を催して楽しんだ。漢文中の「繽紛」は「多く盛んな」「乱れる様」の意。さらに、「燕」には「宴」の意と共に「安んず・くつろぐ」の意もあると、漢学者の簡野道明は『字源』で説く。温泉地にふさわしい言葉だと思う。

古代の庶民が宴して歌い乱れた詳しい様子はわからないが、時代が下って江戸時代中後期に45年間も北東北地方を巡遊した本草学・地誌学者の菅江真澄にその記録がある。1802年12月半ばから「いで湯浴して年暮れ」、翌年4月21日まで4か月滞在した現秋田県大館市大滝温泉で「湯（ゆ）泉の神」をまつる正月8日前後の宴を共にした。

前夜行事「日待ち」では、村長の家に油火をたくさん照らして大勢の人が集まり、銭を積み、この日ばかりは黙認されたばくちをはじめ夜通し遊び興じた。翌日、人々がまた大勢集まり、新年に醸造して湯泉の神にまつった酒を下げてきて楽しく酔いながら、「押付（おっつけ）舞」や「たかうな（竹の子）舞」など踊って戯れ合う。おっつけ舞は男が股の間にすりこぎを結びつけて前垂れで隠し、ほおかむりして身ぶり腰ぶりおかしく舞う。たかうな舞も同様の舞だ。次の日には、女が男の面をつけ、けら（簑）を着て、手ごとに鳴子をつき鳴らしながら歌い舞う。祭りや酒宴で演じられる土俗的でわいざつな舞だからこそ、生きるエネルギーを発散し、共感し合える。

温泉地は、人々が心身を癒す〈湯治場〉として始まった。したがって長逗留し、お互い顔見知りになる。温泉地に出会いがあれば、別れも再会もある。同宿者ならなおのこと、帰る人がいると、別れのはなむけになごりの酒宴が催される。宴に加わった人たちは心地よく酔い、秋田方言で「けや（清）くはな（離）れとお庭の草こ　うらこは枯れても　根こはき（切）れない」（日記『すすきのいでゆ』）と歌うのだ。

温泉地のもてなしのソフト――芸能文化

風土記時代の温泉地も、菅江真澄が見つめた北東北の素朴な湯治場も、地域住民主体なので、酒宴でも自前で歌い踊った。それが温泉地の発展とともに変化していく。

そのとき温泉地の成り立ち、発展をビジュアルにつかむ上で貴重な絵巻が、石川県加賀温泉郷山中温泉の温泉寺である医王寺所蔵『山中温泉縁起絵巻』だ。山中温泉や山代温泉、有馬温泉といった、仏教が温泉に影響を与えた証の温泉寺や薬師堂が建つ温泉地では、開湯縁起や温泉寺縁起が中世の時代につくられている。

温泉地は泉源（湯元）を基に始まる。そこに人々が共同で入浴利用

医王寺蔵『山中温泉縁起絵巻』部分（筆者提供）

宴席で踊る有馬の湯女（『滑稽有馬紀行』）（筆者提供）

する泉源湯つぼ（浴槽）、すなわち共同浴場がつくられる。雨雪をしのぎ、いつでも入れるようにやがて屋根を掛けた。訪れやすく、評判の良い温泉地には遠くから人が集う。絵巻を見ると、湯つぼは老若男女で賑わうが、混浴で男は湯ふんどし、女は腰巻（湯文字）と湯具着用なのは、仏教が広めた入浴規範に則（のっと）っている。したがって日本の温泉は“はだか混浴が伝統”と主張するのは誤りである。1473（文明5）年に本願寺教団の蓮如上人が「加州山中湯治」（『御文』）で入湯したのも、この湯つぼだろう。

さらに湯つぼの周りには物売りの子、座敷で休む人もいる。温泉地に滞在者が増えるにつれ、食べ物を提供する店や休憩所、宿が共同浴場の周りに出来、温泉街が形成される。さらに休む人の傍らで琵琶法師、僧形の芸能者が琵琶を弾いて物語りしているのに注目したい。彼らは入浴者の余暇を慰めるエンターテイナーである。

温泉地は入浴・宿泊・滞在者のためにさまざまなもてなしや余暇を楽しむサービスやソフトを生み出し、提供するようになった。こうしたもてなしを担った存在として、有馬温泉の「ユナ（江戸時代以降「湯女」を当てる）」が知られる。ただし、中世以降存在が見えてくる有馬のユナの役割は、江戸時代前後より大坂や京都、江戸に遊女風の「湯女（ゆな）風呂」が出現して隆盛をみたことから、同一視される誤解を生んだ。

都の貴人が頻繁に訪れる有馬温泉は、早くから宿やもてなしサービスが整えられた。しかも入浴の場は宿になく、伝統的に温泉寺が所有・管理する泉源湯つぼ「元湯」（内部を一湯と二湯に仕切った）だけなので、入浴客の順番や時間を采配する必要があった。この任務から一湯と二湯に担当分けして「ユナ」が生まれ、各宿に配置される。「ユナ」の語源は、中世の寺院で湯沸かしを担う「湯（維）那」職と関わりありそうである。

有馬のパトロンである太閤秀吉が有馬湯治の際に「ユナ」に褒美を与えたように、入浴の采配だけでなく貴人・VIPの接遇も担った。江戸時代には「地元出身に限り、白衣紅袴で身分の高い客の入浴前後休憩の折に座に侍り、碁を囲んだり琴をひき、和歌を詠み、今様を語ったりして徒然を慰めることを技とした女性」（1894年刊『有馬温泉誌』）というように、有馬の表看板としてもてなしと芸能文化を担う役割を発揮した。相手もVIPだけでなく、空いていれば一般客の座敷に出向いて有馬節を歌い舞う。有馬で御法度の色気サービスまで期待した客が叱られたという話が、江戸時代の『滑稽有馬紀行』に記されている。

しかし温泉地でのもてなしや芸能エンターテインメント、ひいては芸術文化ソフトの充実ぶりではヨーロッパの温泉地にかなわない。国を越えて王侯貴族や上流階級、芸術家らが夏場を中心に1か月から2か月近く滞在するヨーロッパの温泉保養地にはカジノ、クアハウス、飲泉施設をはじめ社交場を備えて、無料の野外コンサートやダンスが催され、滞在客同士の交流が盛んであった。

カルロヴィ・ヴァリ温泉のコロナードでの野外コンサート（筆者撮影）

文豪ゲーテの場合は、当時ボヘミア（現チェコ）最大の温泉地カルロヴィ・ヴァリを1785年に初めて訪れ、2か月近く滞在して気に入ったのだろう、『ファウスト』執筆中もほぼ毎夏訪れている。理由はヨーロッパ有数の摂氏72度の間歇（かんけつ）泉を伴う高温泉の魅力だけでなく、滞在を楽しむソフトの充実ぶり、社交の喜び、ひいては女性との恋があった。

ゲーテとほぼ同時期に菅江真澄が体験した北東北地方の素朴な湯治場も、本質的には同じだったのはもちろんである。それが今日、温泉地滞在時間がより短くなったことを口実に、芸術文化ソフトの充実、提供を相変わらず怠ると、温泉地滞在へのモチベーションを失う結果となる。リモートワークやワーケーションの場としても温泉地が期待される現在、この点にも配慮すべきだろう。

芸術文化の受容・擁護者としての温泉地

「貧しきもの、子を養ふは、湯の湧く所にしくはあらじ」(『湯本五郎治家文書』所収)

江戸時代の俳人・小林一茶は信州の湯田中温泉でこう書き留めた。一茶は15歳で奉公に出され、その傍ら俳諧の道に進んだ江戸と信州の故郷を行き来する途中に湯田中渋温泉郷はある。老舗旅館「湯本館」主人湯本五郎治(俳号「希杖」)と息子が一茶の門人となった縁で度々逗留していた。長い間故郷に家はなく、継母・義弟との遺産相続問題を抱え、寂しさを隠しようもない心を親身なもてなしと湯でいつも温めてもらえる第二の故郷となっていた。希杖は露天風呂付き別宅まで一茶に提供し、52歳で独り身の一茶に結婚を勧め、初めて安らげる家庭を得た。しかし生まれた子どもたちを幼くして次々と失う。その悲しみと慈愛のまなざしが温泉地の子供たちに注がれた。

「子ども等が　雪喰ひながら　湯治哉(かな)」(『文政句帖』収録)

松尾芭蕉は奥の細道の旅で那須湯本と飯坂温泉に泊まっても句を作らず、鳴子温泉はただ通り過ぎ、山形県温海温泉入口に泊まった際は同行の曽良のみ温泉に出かけた。温泉に興味が無いかのようだ。それが旅の終盤、金沢をはじめ待ち受ける俳人も多かった加賀国(石川県)に入って立ち寄った山中温泉では初めて心ゆくまで温泉に浸かり、9日間滞在し、温泉を讃える句を詠んだ。

「山中や　菊はたお(を)らぬ　湯の匂(にほひ)」(『おくのほそ道』収録)

温泉入浴一般ではなく、主泉質がカルシウム－硫酸塩泉という源泉から漂うほのかな湯の香のすばらしさを感じとり、句にしたことで、芭蕉はあまたの文士の温泉表現を超えた。芭蕉や一茶が温泉地に長逗留したのは、温泉の良さに加え、自らの創作活動に共鳴共感してくれる人がいたからである。芭蕉を迎え入れた旅館「泉屋」は先の『山中温泉縁起絵巻』に描かれた泉源湯つぼ＝共同浴場を囲む宿の一つ。芭蕉は若い当主久米之助に自分の俳号の一字を与えて「桃妖」と名づけた。桃妖は以後地元俳壇の中心として活躍する。

遠来の客、多様な人々を受け入れてきた温泉地、その受け皿となる旅館主には、すべての人を受け容れるという基本スタンスを前提に、その時代の芸術文化・創作活動の良き受容者、理解者がいた。一茶を生涯支えた湯田中温泉の旅館主のように、彼らはときに芸術家作家の擁護者(パトロン)役も担う。訪れた芸術家作家自身に対する温泉地の最先端センサーであり、芸術文化の受容・理解者としての彼らを媒介に、創作物は温泉地の文化資産として蓄積されていく。

とくに信州は夏場の涼しさと豊かな自然環境ゆえ、避暑を兼ねて創作の舞台となった温泉地が多い。湯田中渋温泉郷角間温泉の老舗旅館(「越後屋」)には林芙美子、吉川英治、横山大観、武田泰淳・百合子夫妻などがよく逗留し、作品も残されている。文部省唱歌「春が来た」「故郷」「朧月夜」などの作詞者・高野辰之は野沢温泉を気に入り、別荘まで設けた。「朧月夜」に唱われる「菜の花畠」は地元特産野沢菜の花畠の情景である。画家の岡本太郎も毎年訪れて名誉村民第一号となり、彼が描いた「湯」のデザイン文字は温泉地のイメージロゴとして今も使われている。

温泉地の特性ゆえの存在意義とは

これまで取り上げた湯田中渋温泉郷も野沢温泉も、温泉資源は〈みんなの資源＝コモンズ(commons)〉として地元住民が総有し、共同管理してきた歴史を持つ。そのお陰で、外部資本などによる資源の濫用や乱開発をこれまで回避している。今日SDGsがうたわれているが、温泉地の人々は温泉資源の持続可能な共同利用に努めてきた。この〈共同性〉は、温泉地が育んだ重要な特性の一つである。

また、先に述べたように温泉地には「湯泉(温泉)の神」がまつられ、仏教の影響から温泉寺や薬師堂が建てられた。地上に(温)泉が湧き出る超常現象を神威と崇め、温泉の神の存在を認めたのは世界に共通する。温泉利用の経験知により、肌が温もりに包まれる喜びとともに治癒効果まで実感すると、温泉の恵みへの畏敬と感謝の念から温泉信仰が育まれる。日本ではその証として温泉神社、温泉寺や薬師堂が泉源を見守る高台に建てられた。温泉地という空間は温泉信仰を核とする精神世界で満たされ、景観形成の基本構造となった。温泉地独自の精神文化がもたらした特性が〈聖性〉である。

これには世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」のバックボーンとなる熊野信仰も関わってくる。「ゆ(う)や」とも読む熊野は中世以降、熊野聖(ひじり)が有馬温泉に定着して宿坊を開き、箱根をはじめ各地の温泉地に熊野神社を遷すなど温泉世界と結びついた。熊野本宮参詣で悟りを得た一遍上人は「踊り念仏」と称される時宗を開き、別府鉄輪(かんなわ)地獄を蒸し湯に活用する道を拓いた。先の世界文化遺産に含まれる湯の峰温泉は聖地・熊野本宮詣での湯垢離場(ゆごりば)で、著名な説経節『小栗判官』を通じて地獄に堕ちた者もよみがえる「再生の湯」として知られた。「再生の湯」とは温泉地の意義をも象徴すると思う。

温泉地の〈聖性〉は、さらに別の特性を育む。それは温泉地や広く浴場の持つ、平和な癒しの避難所としての場の性格を表す〈アジール(Asyl)性〉である。

例は多い。戦国時代に織田信長の命で加賀一向一揆(いっこういっき)を攻め滅ぼした柴田勝家は、一揆勢力拠点の山中温泉に、勝家の軍勢が温泉地内で占拠や放火、伐採など乱暴狼藉を働くことを禁じ、違反者は罰するとの布告(禁制(きんせい))を出した。秀吉も小田原攻めの際に箱根の湯治場だった底倉温泉宛に、秀吉の軍勢の乱暴狼藉を戒める禁制を与えている。

18世紀ヨーロッパの七年戦争では、ハプスブルク家オーストリアとプロイセンが交戦域内のカルロヴィ・ヴァリを含む4か所の温泉地を「平和な中立地帯」と宣言する国際協定を交わし、負傷した敵兵の温泉療養を認めた。これは新大陸でネイティブ・アメリカン諸族間の戦の際も、彼らが聖なる場と崇めた温泉地は平和な中立地として、敵味方なく無条件に受け容れたことと通底する。安心・安全が保証されてこそ、温泉地はだれもが安らぎ癒される。平和な癒しの避難所＝アジールという特性は今も基本的に変わらない。

温泉(地)は近代以降、観光資源かつ観光地となり、雇用と第一次産品の地産地消的な場として地域社会の維持に寄与し、経済価値を高めてきた。その面と同時に、温泉は本来地域住民・国民の健康・保養資産として活用されてきたことも見ておきたい。

この点でコロナ禍は、人に備わる免疫力を保つセルフメディケー

ションの必要性を再認識させた。その手だての一つは温泉活用である。自然環境や情緒、温泉の質など自分好みの〈マイ湯治場〉、解放的な〈避難所=アジール〉を見つけて、温泉浴と転地効果により免疫力低下の要因となる日常生活ストレスを和らげ、心身を安らげてリフレッシュする習慣づくりが望ましい。温泉地での滞在習慣は、免疫力のみならず、温泉地が特性として育んできた精神世界と豊かな文化資産を感受することをとおして、新たなインスピレーションや創造意欲もよみがえらせることだろう。

湯河原温泉「源泉上野屋」にて
photo: 坂上修造

石川理夫（いしかわ・みちお）

温泉評論家。日本温泉地域学会会長。環境省中央環境審議会温泉小委員会専門委員。編集・企画事務所を主宰する傍ら、国内外の温泉地を訪ね歩き、温泉分野の執筆・講演活動及びテレビ・ラジオはじめさまざまなメディアで発信している。2003年に日本温泉地域学会設立以降は、温泉史・温泉文化論の研究ならびに温泉地の活性化に取り組み、学会誌に研究論文発表を重ねている。著書は多数で、近年の著書に『温泉の日本史』（中公新書、2018年）、『本物の名湯ベスト100』（講談社現代新書、2016年）、『温泉の平和と戦争』（彩流社、2015年）がある。
https://onsenchiiki.web.fc2.com/

セゾン文化財団　ご支援のお願い

セゾン文化財団では、当財団の趣旨に賛同し、活動を支援していただける法人賛助会員および個人の皆様からのご寄付を募っております。新しい文化を創造するアーティストや研究者の活動に、ぜひお力をお貸しください。
詳細につきましては下記URLにてご覧になれます。
https://www.saison.or.jp/support

当財団の活動に対しましてご理解・ご支援をいただいています以下の法人賛助会員、個人の方からのご寄付に深く感謝いたします。

（2021年11月現在／五十音順／敬称略）

法人賛助会員のご紹介

セゾン投信株式会社　https://www.saison-am.co.jp/
東京テアトル株式会社　https://www.theatres.co.jp/
株式会社パルコ　https://www.parco.co.jp/
株式会社良品計画　https://ryohin-keikaku.jp/

寄付者ご芳名

市村作知雄様
小野晋司様
中村恩恵様
吉本光宏様

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第96号
2021年12月15日発行
編集人: 久野敦子
発行所: 公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0031　東京都中央区京橋3-12-7　京橋山本ビル4階
Tel: 03-3535-5566　Fax: 03-3535-5565
URL: https://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp

● 次回発行予定: 2022年3月
● 本ニュースレターをご希望の方は送料（94円）実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。
また最新号およびバックナンバーは当財団の以下のウェブページでもお読みいただけます: https://www.saison.or.jp/library